

○阿部部会長 おはようございます。今日は朝早くからお集まりいただき、ありがとうございます。本部会の議論も本当に大詰めに差し迫ってきました。

今日は所用のため野口委員が御欠席で、そのほかの委員は全員御出席いただいているということで非常に嬉しく思っております。というのは、今回は全8回を予定しておりますけれども、その中でも一番重要な会議になるのではないかと考えていますので、皆さんおそろいになってくださってありがとうございます。

まず、議事に入りたいと思いますが、まず今の状況をスケジュール的なところから御説明させていただきます。

まず3月25日に総理との懇談会というものが部会長と部会長代理が出席で行われました。ここでは非常にざっくりばらんに今までの議論を総理にお伝えし、どういう方向に進めていけばいいかというお話をさせていただきました。このときには丸々2時間総理とお話させていただくお時間をいただき、ほかの部会との議論もありまして非常に有意義な討論ができたと思っております。

4月2日にこの資料にあります第3回フロンティア分科会というものがありません。ここで論点整理と中間報告のとりまとめ方針が決定されました。このとりまとめ方針についてはこの後に御説明させていただきます。

それから、第5回部会が本日4月6日に行われております。次に各部会長からの中間報告の部会案を提出ということですが、その期日が実はほぼ1週間と数日後に迫っています。このときに中間報告の部会案をほぼ完成させた形で提出することが求められております。ですので、今回お示しするのはその中の別冊の部分になるところなんですけれども、中間報告の骨子というのは皆様に今までも御説明しています。今日もその議論をしたいと思っておりますが、それは主にこの1週間に私と上村先生の方で執筆させていただくことになるかと思っております。

第6回部会が26日に予定されておりますけれども、申し訳ありませんが、中間報告の締切りがその前にありますので、このときの報告書の案というのは試案ということで提出させていただくことを御了承いただければと思います。ですので、皆様の御意見を今日の部会でなるべくお聞きするようにして、それを反映するような形で報告書に執筆していきたいと思っております。

それから、ゴールデンウィークがありまして、連休明けに第4回のフロンティア分科会を予定しておりますけれども、ほかの部会とも問い合わせして中間報告案を議論いたします。その後1～2週間の間に公表という形になっていくかと思っております。

中間報告案の後には何をするかと言いますと、この後はいろいろな省庁の方に調整等を諮ったり、または最終的に詰め切れていないところを詰め切るという微修正を行っていきます。その会を第7回、必要であれば第8回という形で部会をやらせていただいて、最終報告は6月に発表となります。

ですので、ほとんどすべてのこれからの仕事というのは、この1週間の間に行われると考

えていただければと思います。今日から始まって中間報告の部会案提出の間に、報告書の90%ぐらいの執筆がなされると御承知おきください。

これがこれからのスケジュールとなります。まずスケジュールについて皆さん何か御質問等がありますでしょうか。

○阿部部会長 これが今後のスケジュールとなります。

これから報告書の議論に入るところなんですけれども、その前に非常に嬉しいニュースが1つ入っております。皆様の資料に新田委員と野田首相の2ショットの写真が入っている1枚があるかと思しますので、これについて一言、新田委員よろしくお願いいたします。

○新田委員 おはようございます。御紹介いただきまして済みません。

2～3日前なんですけれども、内閣府のホームページにこの写真が載っているということで地元の新聞なんです、見つけてくれました。非常にラッキーなことに野田総理の隣に席があったものですから。私の表情が幸福部会に似つかわない、皆さんに緊張しているのではないと言われてきましたけれども、余りにやにや、げらげら笑ってもいかなものかと思って妙に口を閉じていましたらこういう写真になってしまったということです。そういうある意味、非常に大変幸福な時間というか、貴重な2ショットの写真を載せていただきました。記者の方から今までの議事録が公開されているものを見て書いていただいて、まとめてもらった内容なんです。これだけ素晴らしい部会が、今日の発表資料を見させていただくとドラマか映画になりそうなぐらいの内容で、古市さんと阿部部会長とやられたそうですけれども、素晴らしい部会だなと改めて思っております。

まとまらない御紹介でしたが、よろしく願いいたします。

○阿部部会長 ありがとうございます。

それでは、報告書の様式について御説明させていただきたいと思しますので、第3回フロンティア分科会における永久事務局長のご説明にそって中間報告アウトラインについてご紹介します。

フロンティア分科会というのはこの幸福部会の1つ上の部会になるんですが、先ほど私が申し上げました、今後提出しなければいけないのは幸福部会の中間報告ですけれども、それがほかの部会とも合せてフロンティア分科会が1つの中間報告をつくります。そのアウトラインとなります。

その構成といたしましては、1章にフロンティア分科会の座長でおられる大西先生のごあいさつ。

2章に総論が入ります。この総論のところは永久事務局長が執筆なされる場所なんですけれども、ほかの4つの部会の議論を総括した2050年のあるべき姿ですとか、切り拓くべきフロンティア、ボトルネックといったことを執筆なさるとお伺いしています。

次に各論に入ります。その中に1～4とありまして繁栄、幸福、叡智、平和があります。私たちは部会として書く中間報告は、この中の幸福のフロンティアのところなんです。ですので全体のフロンティア分科会の大きな報告書の中の各論の1章といえますか、1つの部分

をこの部会の中間報告が占めるということになります。

第3のところで、これはほかの部会からも結構特区構想が出ておりますので、それらをまとめた形で永久事務局長の方で、フロンティア分科会としての特区構想の提案を提言なさる御予定でございます。

これが全体のフロンティア分科会の報告書のアウトラインになります。

それから、色付きのもので資料2として幸福部会の論点整理メモというものがありますので、これをごらんください。パワーポイントのもので、総理との懇談会のときにもこの資料を使いましたし、4月2日のフロンティア分科会のときにもこれを使わせていただいたんですけれども、この中にありますのが大きなフロンティア分科会の中間報告の中の一部の幸福部会の報告書、それをどういうふうに書いていくかということがこの中に入っております。

2ページ、これが幸福部会の報告書の目次として今、考えているものです。1つが、このまま進んだ場合の2050年はどういう姿があるかということ。

2はあるべき2050年の姿。これは比較的かたい文章で政府の報告書にあるような口調で書いていくものとなっております。ですので、このあるべき2050年の姿のところ、皆様から出していただいたいろいろなアイデアが収縮されて入っているところです。それから、2025年までに切り拓くべき領域、ボトルネック、基本原則、政策の方向性ということでもあります。

この6章の章立てというのは全部会に共通して提示されておりますので、このフォーマットになるべく沿うような形で書くようにという指示が出ていますので、このような形で書かせていただこうと思っております。この執筆は今のところはまだほとんどできていないんですけれども、今日の部会が終わった後から私と上村先生で書いていくことになります。

幸福部会がほかの部会と違って1つプラスαのことをしたいと思っているのが、下のところの別冊「2050年のある1日」というシナリオ型の文章を付けようと思っております。これはシナリオと画像によって、かたい文章というのはなかなか読まれないですし、特に若い人なんかはそのような文章を読んでもよくわからないと言って興味もないだろうということで、読み物風にして、こういうものだったらいいなと思えるようなイメージ的なものを提示しなければいけないということで、それを古市委員が中心になって書いていただいております。それは今日の部会の主な議題ですので、後で詳しく説明していただこうと思います。

中間報告書までに何をしなければいけないということで、ここまで皆さん大体おわかりでしょうか。

○永久事務局長 今、座長とも合意したんですけれども、余りかたくない文章で結構です。

○阿部部会長 報告書の本体もですか。

○永久事務局長 はい。

○阿部部会長 わかりました。ちょっとやわらかい文章で。

では、何を書いていくのかという中身の方に入りたいと思います。

「2050年の幸福の姿」の基本軸というところからなんですけれども、ここから上村先生、お願いいたします。

○上村部会長代理 それでは、パワーポイントのページ番号で言うと3ページ目「2050年の幸福の姿」の基本軸についてです。これまでの部会の報告では、内閣府の幸福度指数の話が結構出ていました。そこをある程度踏まえるということを基本にしたいと思います。

内閣府の主観的幸福感の規定要因は3つあります。経済社会状況、心身の健康、関係性であります。さらに、細かい要因があるのですが、細かいところに入るとなかなか議論が進まないで、より大きくこの3つをとらえます。最初の2つは「基本的 Well-being の保障」という形でとらえます。関係性は今までの議論から考えると大事だと思われるので、「関係性の保障」という2つ目の軸をとらえます。さらに新たに「社会の持続可能性の向上」という3つ目の軸を考えます。

次のページです。前回の幸福部会で私の方から3つの軸の図を出しましたが、あれをもう一回組み替えて、この3つの軸に書き直しました。1つ目の横軸が個人の「基本的 Well-being の保障」軸です。これは3次元の図です。奥行き軸が「関係性の保障」、縦軸に「社会の持続可能性の向上」です。この3次元の図の中のプラスをいかに増やしていくかということです。

図に「ライフスタイルのイノベーション」とありますけれども、これは「関係性の保障」と「基本的 Well-being」の保障を高めるため、どういうツールがあるのかというところから考えます。かつ、その中で、縦軸の「社会の持続可能性」を向上させていくというイメージで、これが2050年に向けた幸福のイメージだと考えました。

個々の話に入るとなかなか難しいのですが、5ページ目に行ってください。「基本的 Well-being の保障」ですけれども、これについては今のところ4つを考えています。基礎ニーズの充足、貧困の削減、機会の平等、格差の縮小、これらを「基本的 Well-being の保障」ととらえています。

「関係性の保障」については、まさに交流とか居場所とか絆というものです。キャッチフレーズも居場所と絆と書いていますけれども、個人とか家族のつながり、地域、社会のつながりというものを保障していくというのが2つ目の軸です。

この2つの軸をより高めていくために、「ライフスタイルのイノベーション」があるのではないかととらえています。大事なものは、働き方をいかに変革するか、もしくは暮らし方を変革していくか、いかに参画をしていくか、というイメージです。

最後に3つ目の軸として「社会の持続可能性の向上」があります。持続可能性というのはいろんな概念があると思いますけれども、単に財政の持続可能性だけでなく、社会全体で、かつ、地球規模のようなものも考えています。食料もそうですし、ひよっとすると安全保障もそうかもしれません。というような社会全体の持続可能性を向上していくことが、第三の軸として必要ではないかと思っています。

こういう考え方を踏まえて中間報告書を書きたいと思っています。

以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

1点だけ付け加えますと、このところには教育の議論はどこに入れればいいのかわからなかったのですが、この時点では入れていないんですけれども、今の考えでは恐らく社会の持続可能性の向上のところ、教育の改革が入るのではないかと思います。

本来であれば、ここで一度議論をしたいところなんですけれども、よりここに書くことを具体的にどういうものかわかるためにシナリオというものをつくっておりますので、それを古市委員の方から発表していただこうと思ひまして、その後には皆様の議論、今、上村先生の方から言ってくださった基本軸のところまで含めまして、議論をしていきたいと思ひます。

では、古市委員、よろしいでしょうか。

○古市委員 お手元に準備していただく資料は「2050年のある一日」と書かれたシナリオと、席上配付となっている登場人物とシーンのラフを描いたような汚い絵です。済みません、しっかりした場でこんなものを配っていただくのはすごい申し訳ないんですけれども、ただ、このシナリオに関してもこのラフの絵にしても、あくまでも私と阿部先生、上村先生の3人で書いた個人的な案ということをお伝えしておきます。あくまで今日用に準備したたたき台であって、えらい人のチェックも入っていません。なので今日ここでこれから説明させていただくんですけれども、これを踏まえてのいろいろな御意見だとか、これがまだ入っていないとか、これを逆に削った方がいいのではないかとという建設的な議論を今日はできればいいと思っています。

では、早速この2050年のある一日というシナリオの説明に入りたいと思ひます。一応、事前に資料をお配りしておいたと思うので、ざっと流す形で流れを説明したいと思ひます。

まず、1章、2章、3章の3章構成になっています。

1章は、ある都会での一家の一日。

2章は、ある地方都市での一日。

3章は、ホスピスでのある人の最期という3部構成になっています。

第1章だけ人物構成が混み入っているの、汚い登場人物の関係図を見ながら見ていただくとわかりやすいかもしれません。名前は機械的にこの幸福部会の方々などの名前を勝手に入れてしまったので、面映ゆいところとかあるかもしれないんですけれども、ある一家というのはトシユキさんがお父さん、アヤさんがお母さん、その2人の子どもがトシオ君とヨシエちゃん。それにまつわる人々が出てくるという構成になっています。

早速シナリオを見ていただいて、ざっくり流れを説明したいと思ひます。シナリオはある都市の一家の朝の1日から始まります。お父さんのトシユキさんが子どもに起こされる。そこで起こされてアヤさんと合流する。そこでもアヤさんは朝から仕事をしているのかと思ひたら、バカンスの予定を考えている。これは就業日数が減少して将来は日本でもバカ

ンスみたいなものが一般的になるだろうということの想定の下で書かれています。

それで朝食を家で食べるのかと思いきや、家の近くにある屋台村というところに行きます。この2050年においては朝食を自宅で食べるのではなくて、屋台村も含めて食のスタイルも多様化しているということをここでは表しています。そして屋台村というものが規制緩和などによってだれでも参加できるようになった。トシユキさんが向かったのはあるベトナム料理屋さんです。このベトナム料理屋さんではベトナム人女性の方がフォーとかグリーンカレーをサーブしてくれるんですけども、ここでは外国人の人も日本にどんどん入ってきているということが1つと、実はこのベトナム料理を提供しているスーさんという人は、トシユキさんが今、通っている大学の先生でもあるということが入っています。

つまり、1人の人であっても大学の先生だけではなくて、屋台村でサーブもしているみたいな、そういうフレキシブルな就労ということをここでは表現しています。本当はすごいやわらかい文章をちゃんと形で説明するのが不思議な感じなんですけれども、こんな形で続けます。

ここで屋台村の話がありまして、トシユキさんは1週間のうち2日だけ会社に勤めて、3日は大学に通っています。つまり男性であっても月曜から金曜まで、朝から晩まで働くのではなくて、こうやってある日は会社、ある日は大学みたいな形でフレキシブルな労働、マルチプルな労働をしているということをここでは表現しています。

2ページ目、一方でアヤさんは子ども未来省、将来設置されているかもしれない省という設定なんですけれども、そこで週5日のフルタイムで働いている。ただし、フルタイムと言ってもそこまで長時間労働ではないということが書いてあります。そこに行くまでの経緯としては、今の日本ですと正社員のお父さん、専業主婦のお母さんをモデルにした社会保障制度が提供されていますけれども、そうではなくて正規とか非正規の区分がなくて、だれもが同一賃金、同一労働の下で働くというスタイルが普及しているということを、2ページ目の真ん中辺りでは書いてあります。

朝食が終わりまして、皆さん会社や学校に向かいます。トシオ君が向かうのは近所の小学校です。近所の小学校では英語教師のマークさんにまずトシオ君はあいさつされます。これはどういうことかと言うと、マークさんは去年まで外国語劇のNPOのスタッフをしていた。つまり教職課程というものが大分改革されまして、さまざまな社会人経験者なり多様な先生が教育の現場に関わっている。ここでは偏差値偏重主義の時代は終わっていて、いわゆる5教科だけではなくてリーダーシップだとか表現力、想像力、共感する能力だとか、そういったことを教育に盛り込まれているということです。

一方で教育の方式に関してもいろいろな変更があって、デジタル教科書だとかいろいろな仕組みによって勉強は苦痛だという意識が子どもたちから消えているという設定になっています。

3ページ目に行っていただいて、地域ボランティアの手も借りながらマン・ツー・マンの補習授業も行われている。私立の一部の大学を除いて高等教育までの学費はほぼ無料に

なっているという設定です。

9時でこども園というシーンになります。こども園はトシユキさんとアヤさんの子どもの2人目のヨシエさんが向かう場所です。こども園では地域の中学校、小学校のお兄さん、お姉さんとかも集まってきて、子どもだけではなくて年齢が大きい子の今で言う学童保育的な場所も込めた、地域の子どもたちが集まる場所となっています。このころには出生率も大体2.1ぐらいまで回復しているという想定になっています。それには「子どもは社会の次世代を担う存在」という認識が政治的主張に関わりなく広がるようになったという想定があります。

コミヤさんという60歳の女性がいるんですけども、この人たちとトシユキさん一家は屋台村つながりだったりとか、いわゆる疑似家族的な仲良しのつながりとして登場させています。

4ページ目は電車の中の風景になります。電車の中では満員電車というものは過去のものとなっています。なぜかと言うとオフィスの一極集中が緩和して、かつ、在宅勤務が普及したという設定になっています。ただ、そうは言ってもまだ会社に通う人がいるので通勤電車みたいなものはあるという想定なんですけれども、電車の中吊りの場所にあるモニターには政府広報が流れています。この時代では政府広報だとか政府や都議会の広報を伝えるような情報が街中にいろいろあふれていて、これがすごい面白いものとなっているという設定です。今の政府広報は無味乾燥なものが多いですけども、そうではなくて外部のジャーナリストだとか研究者を積極的に登用して、政策に批判的な意見も含めた面白い政府広報を、この時代では電車の中であったりとかいろいろな場所で流しています。

政治を面白くしたのが、社会保障財源の見える化システムというものも登場したという設定になっています。どういうことかといいますと、社会保障の状態などをだれもがわかりやすく見ることができるような仕組みというものが普及しています。かつ、学校教育の場であっても、労働法とか税法をしっかりと教えるようになっていくという変化がこの時代にはあります。今、皆さんがいらっしゃる霞が関なんですけれども、建物自体は40年後も変わらずぼろぼろだとは思いますが、ただ、地域への権限移譲が進んだため、中央省庁はすっかりコンパクトになっているという設定です。だから東京にある地方庁舎という感覚になっている。地方分権というものが大分進んでいるということをここでは想定しています。

10時、公共広場の公園というシーンなんですけれども、ここでは教育のIT化によって教科書というものが画面だとかIT化が進んでいるという設定になっています。一方で本というものが全く消えたわけでもなくて、トシユキさんは2025年の当時から見れば25年前の古典の教科書を読んでいるというシーンが出てきます。

これで4～5ページにトシユキさんのちょっとした人生があるんですけども、トシユキさん自身は今、週3回大学に通っていて、高校を出て2年間通った後に二十歳のときに就職が決まっている。このときに大学を中途退学していた。その後、働いた後に残念ながら

ら関わっていた雑誌が閉刊してしまって失業してしまった。そこで現在は週2日はある介護システム会社の中国支社に勤めている。ただし、一方でテレワークなので南関東市の自宅で在宅勤務をしながら、その一方で学生というものもしている。ただ、ここでは参加手当という制度ができているので思う存分好きな勉強ができるようになっています。参加手当、つまり最低生活保障の徹底ということを表しているんですけども、この中では別に税金をもらうということが、今の生活保護のような形でスティグマではまったくなくて、税金を払える人が払う、もらう人はもらうというお互い様だという感覚が普及しているという設定になっています。

大学のシステムに関しても大分フレキシブルになっています。2年間通って、その後、働いて、また2年間行くだとか、違う大学に単位を互換するとか、そういうようなフレキシブルな履修制度がこの時代には普及しています。

大学に来ている人もばらばらです。国籍もばらばらですし年齢もばらばら。そのばらばらな人と年齢を集めて、トシユキさんは大学の同級生を誘って新しい仕事を始めるつもりでもあります。この時代には南関東市は起業家に優しい街として注目を集めていて、特に湾岸地区にある特区では大幅な規制緩和によって、さまざまな企業の誘致などを行っています。

6ページでは上の方で特区の話です。12時に行って公共広場になります。公共広場ではトシユキさんのお父さんが今、75歳のケンさんの話が出てきます。近く場所に住んでいるので一緒の家には住んでいないけれども、同じ生活圏の中で暮らしている。高齢者にとっても優しい街になっているということが描かれています。

17時、書齋ということでこれは1日の終わりで、110歳のケンさんの父、ダイジロウさんの名前だけ登場するんですけども、ダイジロウさんに関しては3章で描かれていますので、7ページに行ってください、7ページ目に行くとトシユキさんが久しぶりに食事を自分でつくったんだけど、余りおいしくなかった。このパスタいまいちと言われてしまうようなシーンが18時半の食卓の風景で描かれています。ここでスーさんとかコミヤさんとか今まで登場した人がいろいろ集まってきて、これが何を表現しているかと言うと、家族という言葉の意味がある種あいまいになって、ただし、だからこそ拡大した家族というものがその時代には普及しているという設定になっています。これが大体1章のアウトラインで、2章に行きます。

2章はある地方都市の1日です。登場人物はユウジさんは20歳のある地方議員、ナナコさんは28歳で地方議員、ナナコさんの娘のエリコさんが3歳。この人たちはみんなあるコーポラティブ・ハウスと一緒に住んでいるという設定です。

2章の一番初めでは、ユウジさんとナナコさんという2人の若い地方議員の会話から始まります。これが何を表現しているかと言いますと、公職選挙法が改正されたという設定で、選挙権が17歳以上、被選挙権が20歳以上の国民に与えられるようになった。つまり若年層に配慮した選挙制度改革が実施されているという設定です。かつ、寿命ウエイト付

きの選挙制度も実験的に始まっているという設定になっています。つまり若い人ほど1票の重みが多い。年配者の人ほど1票の重みが低いという、次世代の人々に対しての1票が重くなるという仕組みが普及しているということを表しています。若年層の声を反映してか、若い政治家の方々が増えている。総理大臣は38歳という設定になっています。

8ページ、ただし、議員、政治家と言っても職業としての政治家というものが大分減っていて、特に地方議員に関しては無給ボランティアなのが一般的になっているので、ほかの仕事しながら政治家もする。仕事を大体夕方までして、その後で議会に行くみたいな形の働き方が一般的になっているという想定です。ここではユウジさんという人がインターネットなどを使って、昔よりも選挙が簡単になったので当選して働いているという設定です。同時に選挙に関してもインターネット選挙が実施されたりだとか、投票に関してもインターネットでいろいろできるようになったりとか、選挙の日は街ぐるみのお祭りになるので投票率が飛躍的に上昇しているという設定になっています。

その2人は議会に向かう前に市役所併設のレストランに向かいます。ここはニッタ市と言うんですけども、ニッタ市という場所で採れた野菜が主に提供されています。当時は自給自足という形で、食とか水とかエネルギーというものが地域の中で賄われるような、生存圏内の食の安全供給がなされるようになってきているという設定です。

9ページ目に行っていただくと、食とかエネルギーというものがある種地域の中で完結しているというようなことが描かれています。議会が終わりましたナナコさんとユウジさんは同じコーポラティブ・ハウスに帰ってきます。ここではさまざまな年齢だとか国籍の人が一緒に住んでいる。個人個人で自分の家はあるんだけど、共有空間もある。そういうような家に皆さんが住んでいるというイメージです。今でもシェアハウスみたいなものは2012年の日本にもありますけれども、成人しても子どもができてそのコーポラティブ・ハウスの中で住むような形態が、2050年には一般的になっていくだろうという想定の下です。疑似家族というものが拡大しているという点においては1章と共通していると思います。

このニッタ市という場所の都市の風景が描かれるんですけども、自動車ではなくてコミュニティビートルと呼ばれるようなだれでも使える車いすのようなものと、徒歩とか自転車とかトラムの普及によって、高齢者であっても子どもであっても歩きやすい街になっているという設定です。

10ページ目は、街中は自動車が余り走っていないので安心して遊べる広場もある。その広場ではいろいろなイベントが開かれているという設定です。ここでクニミツさんという68歳のこのコーポラティブ・ハウスに住んでいる女性が出てくるんですけども、クニミツさんとユウジさんとかナナコさんが今度の土曜日にするイベントの話をしています。

ここで1個言っているのは高齢者であっても社会にちゃんと参加している。ボランティアだったりとか仕事という形で、いろんな人が多様な参加の仕方をする社会というものが実現されていることをここでは表現しています。

ナナコさんが議員のほかに働いているのは生活コンビニという場所です。生活コンビニというのは介護施設とか託児施設とか診察室などが整備されていて、そこがある種、生活相談の場になっている。何かあったらここに行って相談すればいいという場所が生まれているという設定の下で書かれています。ナナコさんはこの生活コンビニで働いているという設定です。

最後の方でオオニシ君とかいろんな人が出てくるんですけども、こういうある種疑似家族的な空間の中で、皆さん若い人であっても高齢者であっても社会に参加しながら暮らしているということが2章では描かれています。

3章は構成が変わっていて、先ほどの1章の主人公トシユキさんの祖父に当たるダイジロウさん110歳のホスピスでの風景が描かれています。ここは主に阿部先生に書いていただいたんですけども、ダイジロウさんは2050年に110歳なので1940年生まれ。つまり今の2012年でも既に70歳ぐらいのいわゆる高齢者の人がその時代まで生きたという設定です。

この章ではダイジロウさんという1940年生まれの方が、日本の高度成長期とジャパン・アズ・ナンバーワンと呼ばれる時代、日本が低成長期になっていく時代というものをすべて生きた人の回想としての日々のことが描かれています。ダイジロウさんに関しては妻のアキコさんが65歳でなくなってしまって、それから長い50年以上の人生を送るわけですけども、それでは、この中で別に高齢者だからと言って1人で孤立したわけではなくて、近所に住む犬の散歩仲間経由で高齢者の社会参加を推奨する必要性を気づかされるというような回想をしています。

12ページ、今の世代間格差の論争に絡めた話が出てくるんですけども、今、若者対高齢者という形で世代間格差というものが今にわかに問題になっています。例えば高齢者はお荷物で経済の足を引っ張る老害だという議論が2012年の日本にはあります。ただし、一方で高齢者が暮らしにくい社会というものは実は若者も暮らしにくい社会だということが、この物語の設定の中ではそこに社会的合意が生まれて、ある種若者の社会参加を求める運動と、高齢者のダイジロウさんたちの運動が共鳴する形で、人々が自分のペースで生きがいと尊厳が保てる社会参加というものができそうな社会がいいのではないかという、社会的運動が発展したという設定になっています。そのためには高齢者であっても若年層であっても税を負担する。何歳であっても自分のできる形で社会に貢献していく。そのような社会というものがダイジロウさんがちょうど80歳、90歳ぐらいのころに実現していった。110歳になってダイジロウさんはこういう長い長い一生を振り返りながら、長く眠りにつくという終わり方になっています。

大体シナリオに関しては1章、2章、3章という構成になっています。初めに説明しましたようにあくまでもたたき台というか、阿部先生、上村先生、私の3人で深夜の時間分担、すごい不思議な時間分担をしながら書いたような、ちょうど阿部先生が10時から12時ぐらいまで書かれて、その後、上村先生が12時から深夜2時ぐらいまで書かれて、その

後、私が2時から4時ぐらいまで書くというすごい不思議な仕事の分担をして書いたものなんですけれども、あくまでもたたき台なので、ここで今日建設的な議論、ここは違うのではないかという批判というよりは、逆にこうした方がいいとか、こういうことを盛り込んでほしいみたいな建設的な意見をいろいろこれからいただければいいと思います。

私の方からは以上です。ありがとうございました。（拍手）

○阿部部会長 ありがとうございます。

先に言い訳みたいなことを言いますと、シナリオに皆様からの意見がすべて反映されているというわけではないということは御承知おきください。というのは、うまくこのような1日に入るものと入らないものというのがあるんです。ですので残り人物を追ってしまふときちんと入っていないところもあるので、そちらの方で書き切れないところは本体の、これはあくまでも別添の読み物なので、本体の方の報告書に書き込ませていただくつもりです。

本体の報告書も皆様の意見をすべて100%記述するという形ではなくて、その中でみんなが合意できるようなところという形で私と上村先生の方で報告書を書いていきますので、皆様からしたら消化不良の部分もあるかもしれませんが、そのところは何とぞ御了解いただければと思います。

実はこのシナリオの中にはすごくいっぱいアイデアが詰まっているんです。ですので、そのアイデアと先ほどの上村先生が出していただいたポツ打ちみたいな形での方向性というものの合致するところを、なるべく反映するような形で書いております。なので両方そろえてコメントをいただければと思います。ここをこうした方がいいのではないかとか、この設定はおかしいのではないかとか、ここは行き過ぎではないかとか、こういうふうにした方がいいのではないかとか、何でも結構ですし、どなたからでも結構ですので御意見をいただければと思います。

○福島委員 まず上村先生が出された方から、すごく基本的なことで、どこかで伺おうと思いついて忘れていたことなんです、Well-beingをどういうふうに定義するのかということです。これを1つ確認しておきたい。

共通理解として Well-being というふうにそのまま言ってしまうと、一般の日本人のとらえ方がいろいろあると思うので、多義的なので、この部会ではどういう意味合いを込めて使うかということが1つです。

もう一つは3つの軸で整理なさっていましたね。最初は基本的な Well-being と関係性と社会の持続可能性の増大について、上村さんから休んでいらしたときの3次元のイメージ図では、未来の幸福度増大みたいなふうに3つ目の軸を書いておられて、私は3つ目の次元を未来というふうにしてしまうと、あとの2つは未来に関係ないのかと突っ込まれたときにどうするんでしょうかねという発言をしていましたので、今日も同じような趣旨で、将来に向けての持続可能性が増大していくということは重要なんですが、持続可能性という問題と各自の Well-being や関係性というのがどういう関係になるのか。つまり、

Well-being にしても関係性にしても将来の持続可能性は当然必要なものであって、持続可能性を取り立てて切り出すのはどうなのかなということですね。

付け加えます。これも上村さんがいらっしやらなかったときに私が申し上げたのは、私自身もよく3次元モデルをつくって使ったりするんですが、これは4つ目のファクターが出てくると図示できないので、高等数学になるので、もし4つ目のファクターが出る可能性があるんだったら、3次元モデルはやらない方がいいかなというのが私の意見です。

シナリオについて、本当に御苦勞様ですと申し上げたいです。古市さんだけではなく部会長や上村さんも合作だそうですが、こういったものは例えばこんなのはできっこないとか、こんなものは無理だみたいなことを言うのは簡単で、幾らでも疑問や質問を出すことはできるけれども、ではお前つくってみろと言われてたら普通はなかなかできないことなので、とても素晴らしい。ユニークで、議論のネタになるだけでもとても素晴らしいと私は思います。

その上で私の個人的な感想としては、例えば教育の分野では教育クレジット制みたいな話が出てきますね。単位を持っていける話とか、どこで取った単位でもほかの大学とか学校で使えるというような、以前からあるアイデアではありますが、そういうものをもっと広めていくというのは実現可能性のあることだろうと思いますし、生活コンビニというアイデアも非常に複雑多様な行政サービスが一元化されるということは、そんなにお金もかからない。この2つのアイデアはそんなにお金もかけずにできるよいアイデアだなと思いました。

その一方で、やや具体的なイメージがつかみにくいなと思ったところがあって、最後おじいさんが亡くなるときに過去を振り返る場面がありますね。それで若者と高齢者の置かれている困った状態、大変な状態というのがある種共鳴して、その2つの運動がシンクロナイズして行って社会を変えていったなというような回想の場面が出てくるんですが、それが恐らく、今から数年とか10年という時期にそういうことが起こるとよいかないというお気持ちが込められているんだろうと思いますが、そこはすごく大事だなと思っていて、それをどうやってやっていくか。

この部会にしても幸福を実現化していく、社会の持続可能性を高めていく、あるいは豊かさを追求していく、あるいは人口の構成のアンバランスな部分をうまくクリアーしていくことのかぎを握る、若者と高齢者をどうつなぐかというところ。ここはおじいさんが回想しているだけなので具体的にはわからないんですが、もし何かイメージがもう少しあればお伺いしたいなという、これは質問ぼくなりますが、以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

一番最初の Well-being の話だけ私からお話します。現在やはり上村先生から説明していただいたのはまだ本当に骨子の状態で、これに何十ページかの報告書にここからふくらませていきますので、その中で定義づけていきたいと思いますが、Well-being という

言葉自体がわかりにくいということの御指摘は、フロンティア分科会からも出たと思います。基本的ニーズという言葉を使ったんですけれども、ニーズという言葉は福祉の分野の方ではよく使われるんですが、やはりこれも一般市民にはなじみがないという御指摘も受けております。

内容としてはここに書かれておりますような基本ニーズの充足で住居、食、物質的剥奪、医療、介護、福祉サービス等がすべての人について満たされている。貧困が削減されている。子ども期の社会経済状況による健康、学歴、体験、体力、国際性、創造性、コミュニケーション能力などの格差の解消。格差が許容範囲内におさまっており、安心安全な日本社会が継続しているような状況ということを書き込んでいきたいと思います。

ただ、Well-being とかニーズという言葉にぴったり合う日本語でぱっと訳がつけられるかということ、そこが難しいところで、逆に皆様にどういう言葉であったらすんなり入るのかなということをお聞きしたいと思っています。今の時点ではニーズか Well-being かどちらかわかりませんが、使って、それを説明する文章を入れるしかないかなと思っています。

○上村部会長代理 3次元の図ですけれども、先生がおっしゃるとおり、4次元目があるのではないかと、4次元目は図に表現できないということがあります。ただ、私が図にこだわっているのは、シナリオもそうなんですけれども、わかりやすさです。政府の報告書をだれが読むのかということ想定したときに、一見して図だと、もしくはイメージだと、すぐに視覚的に入ってきます。つまり、わかりやすく書きたいということです。

確かに図で例えば、個人の持続可能性はないのかということ、そうではありません。個人の持続可能性もすごく大事です。ただ、そういう細かいところを突き詰めていくと何も言えなくなってくるので、私のイメージの中では基本的 Well-being のところは個人単位である程度考える。関係性は個人間のつながりとして考える。社会というのはもっと大きな地域なり国家なり世界かもしれませんが、そういうようなことをイメージしているということです。

これをうまく文章で表現したいと思いますが、そういうイメージでこの3次元の図を書いているということです。

○阿部部会長 あともう一点、最後の110歳のタイジロウおじいさんの話のところなんですけれども、私がここで書きたかったのは、高齢者はそのころの人口の過半数の方々なんです。その方々たちの Well-being を考えずには社会全体の Well-being も考えられないですし、幸せも考えられないわけなので、それと近ごろ始まっている「高齢者が足を引っ張っている、高齢者がお荷物だ」みたいな世代間対立を何とか緩和させたい。

そういうメッセージを発したいということで、今までのシナリオはどちらかと言うと若い世代のことがよく書かれているんです。トシユキさんも35歳ですし、ユウジさんとかナナコさんは20歳代です。なので、高齢者というのはどういうふうな働き方をしているのか、どういうような社会参画をしているのかということで、その2つは同じ方向を向い

ているんだということを言いたいなと思って書いたんです。

ただ、具体的にどうやったら高齢者の方のムーブメント、社会運動と若者の社会運動とが連携していったかというところまではまだイメージできていないのが現状です。こういうものはお風呂に入っているときとかにぼこっと出てくるので、もう何日か考えてみようと思いますけれども、1パラグラフぐらいはここで付け加えることは可能かなと思います。皆さんもいいアイデアがあったら。

○小宮委員 高齢者と若者の運動が共鳴していくということに関して、私もそういうことは是非やった方がいいと思います。これについては、アイデアの一部がもう既に盛り込まれているのではないのでしょうか。それが公共広場です。この場には、各世代の人間が集まってくるので、そういう場が設けられることで、今の若い世代と高齢の世代と一緒に交流できない、隔離されているような社会をつなぐ場が提供され、コミュニケーションが増えていくことにより、お互いの考えていること等がわかり合えるようになるのではないのでしょうか。つまり、そういう場が設定されることが共鳴の運動につながっていくのかなと思います。そのようなことをもう少しきちんと書けばよいと思います。

○阿部部会長 いいアイデアですね。公共広場をここら辺に入れたいと思います。ありがとうございます。

石戸委員、どうぞ。

○石戸委員 まず素晴らしいの一言で、感謝と敬意をお伝えしたいと思います。

この類の話はいつも大体同じようなキーワードが出てきて、具体的に1つの言葉として表現できているかは別として、私はみんなの認識の中で、方向性はほとんど一致しているのではないかと考えています。そう考えると私は抽象的な議論はもう要らないのではないかと考えておまして、具体的にどういうアクションにつなげられるかが大事だと思います。そういう意味でこのように具体性のあるストーリーが出てきたことはすばらしいことだと思っております。このストーリーに関しては、すべての論点を網羅的に入れることは無理だと思いますので、委員の皆さんがどうしてもこれは追加したいということだけをプラスすればいいのではないかと思います。

これをつくるに当たって入れたい要素を初めにまとめられたかと思うのですが、ストーリーがけっこう長いので、それぞれのシーンで、目標・目的、具体方策、それによる効果・変化といったことを横に書かれるといいのではないかと思います。例えば食のスタイルの多様化を目指して屋台村という具体案が提案されていて、それによる変化というのは栄養バランスがよく、みんなが健康になったとか、コミュニケーションが活発化したとか、3つぐらいの軸で入れた要素をまとめておくと報告書にも使えるし、ストーリーを全部は読まないけれども、要素は知りたい人たちにとっては有益なのかなと思いました。

一番初めにお見せした教育のデジタルの未来の映像をつくる際にも、初めに入れこみたい項目を列挙して、それをストーリーに落としていくということをしたのですが、初めにピックアップをなさっていると思うので、もしよろしければそれをいただいて整理をする

だけで簡単につくれるのではないかと思いました。

また、本質的な話と少し違うのですが、最後の終わり方のところでどうかなと思うところがありまして、それは未来を語るところで人が亡くなられて終わりというのが、これは確かに人生が終わってすごく美しいストーリーになっているのでいいのかなと思いつつも。

○阿部部会長 死んだとは言っていないです。死んだと思わせるけれども、それは書いていないというところを目指したんですけれども。

○石戸委員 なるほど、本質的な議論と違うかもしれないのですが、ストーリーを読んだときに最後の場面は人の心に強く残るので、どういうふうになるかというところは慎重に考えるといいかなと思いました。

1つの例なのですが、デジタル教育の未来社会の映像をつくった際に、最後に登場人物全員に、こんな社会になってよかったねというのを語らせるというふうにして終わらせました。例えば今回の登場人物はこの委員の皆さんで、それぞれに思っている未来社会というものがあって、このストーリーの結果としてこんな生活になってよかったなといったことを1人ずつに語らせるようなものをあとがきとして入れるとか。

○阿部部会長 皆さんの似顔絵付きで、一言ずつ。委員の合作で報告書というものは書かれるものですので、いいのではないですか。

○石戸委員 そうできると未来のイメージにつながるかなと思いました。

以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

永田委員、どうぞ。

○永田委員 財務の視点が弱いかと思うんです。幸福はいいんですけども、それを支える現実性といいますか、そういう面で今ここに書いてある中でどういうものに一番お金がかかるのかということを見なければいけない。もう一つは多分近いうちに首都に地震が来ると思うんです。それで大きな財源を使う可能性が非常に強いわけなんです。

そういう中で今、我々の大きな問題になっているのは医療です。医療の財源を減らせとは言いませんけれども、今の医療の在り方がベストだとは思っていません。せっかくホスピスの話で医療の方に切り込みを入れるのであれば、もっと財源の負担を軽くするような医療の体制が今から40年もあればできると思うので、そういうものを入れ込む。あと、夢物語でも実現性がなければ意味がないので、もう少し実現性を持ったものにした方がいいのではないかと、つまり読んでいる人がこんなものは理想だねと終わってしまうのではなくて、これだったらできるねというレベルまで抑えた方がいいのではないかとと思うんです。

○阿部部会長 具体的には医療の部分は私も余り専門ではないので、最後のホスピスは医療現場に話を持っていきたいと思って入れたんです。ただ、介護ロボット以外になかなか余り思いつかなくて、そこら辺で何かアイデアはありますか。

○國光委員 私も前回プレゼンで入れたんですけれども、Well-beingにもつながる点として、いつでも、だれでも、どこでも、医療のアクセスは保てるような社会であればと思っ

ています。でも入っているなど思ったのは、生活コンビニで診察室というものがあって、これは恐らく診療所レベルですね。大病院ではなくて診療所レベルは生活コンビニに行けばアクセスができる。そこで総合医などがいて、どういう症状でも初期診療は対応してくれるというのがあるかと思います。

ただ、医療も非常に細かい制度で、言い出したら切りがないのですが、1つ入れていただけたらと思ったのは、永田委員と同じく財政の話でありまして、今、社会保障給付費は全体がおよそ108兆円で、年金が5割、医療が3割、福祉等々が2割ぐらいですけれども、高齢化や医療の高度化などのいわゆる自然増によって、医療費の伸び率は年金以上に大変高くなるということが指摘されています。そのようなことから、未来に向けての鍵は、給付の効率化や重点化とともに、負担能力のある方がいかに負担をしていただくかということだと思っております。そのために、高齢者と若者が一緒に議論をしていく、公共広場のような場所もそうですし、電車の中吊りなどごくごく身近なものも活用し、論点を身近に感じていただき、様々な参加や熟議を通して社会の認知度を上げていく必要があると考えています。高齢者を含めて年齢を問わず負担能力のある方は、社会的弱者や困っている人のために負担をするということを、ぜひエッセンスとして入れていただければと思います。

○阿部部会長 それは入っていると思います。負担の方は入っていると思うんです。ただ、医療費の削減の方が入っていないです。今の医療体制ではどんなに負担してもというところなんです。そこで最後のホスピスのところでどうやったら医療費を削減することができるのかということで、私が1つ迷ったのは、このダイジロウさんは110歳なんです。でも戦前に生まれている人にしたかったんで、そうすると110歳になってしまったんですけども、彼が何年間ホスピスに入っていることにしようかすごく迷って、それは書いていないんです。最後の1年間しか入っていないとしたら、ではそれまでどうやってダイジロウさんは生きてきたのか、医療をどうしてきたのか。そこら辺の話も入れたいんです。ただ、余りアイデアがないので、もしアイデアがあればと思ったんです。

○永田委員 今から38年後ですね。38年前を振り返ってみたときに、いろんな時代の流れがあったと思います。いろんなイベントがたくさんありましたけれども、我々が生きた中ではITの登場はすごいんです。これが医療の中に十数年、ものすごい勢いで入ってきているんです。

ですから38年、別に38でなくても30でも50でもいいんでしょうが、そのぐらいのスピードで考えたときには今の医療が根本的に変わる可能性が非常に高いです。医薬に関して、我々は今、最先端の研究をやっていますけれども、今まである薬というのは大体病気の2割ぐらいしかカバーしてないんです。8割は薬になっていないんです。その8割になっていない部分に対して、抗体医薬や核酸医薬などのようなものが恐らくできてくるんです。そうするとかなりの病気が事前に抑えられる、あるいは初期の段階で治せる、あるいは診断技術が非常に進んで別に病院に行かなくたって家でも診断できるようになる。そう

いうふうなことができれば医療費は、医師としての発言としては不適切なんですけれども、医者がそんなにたくさん要らなくなるような感じがするんです。そして余り医療費を使わなくてもいいような感じです。

○阿部部会長 それはIT技術などの発展で、例えばダイジロウさんがいる介護施設にお医者さんがいなくてもいいという設定もできると思いますか。

○永田委員 医者という分類以外にも、例えば看護師もここ10年ぐらいで随分できることが増えてきましたし、薬剤師も6年制になりました。いろいろな新しい資格制度も出てきたので、そういう人たちが30年もあればもう少しレベルがアップできると思うんです。医師でなくてもそういう人たちでできるところが非常に増えていくのではなかろうかと思えます。そういう面で医療財政が非常に楽になったということは書いてもいいのではないかなと思うんです。

○阿部部会長 新薬の開発とIT技術などで。

○永田委員 診断技術、治療技術ですね。そのITの導入、新薬、特に抗体医薬や核酸医薬が入ってきたということは言えるのではないかな。そして遺伝子からタンパクのところに入ってきていますので、そういう分野でいくと初期にいろいろなものがわかってくるんです。そうするとかなりの医療費を抑えることができる。例えば極端に言うと10兆円が5兆円になり、3兆円になるというレベルで抑えられたんだというのが入れば、これはすごく現実的でもありますし、30年というスパンから考えると可能性は高いかなと思います。

○阿部部会長 その技術をここに加えたいと思います。そこは確認のためにパラグラフだけお送りしますので、間違っていないかだけ後で確認させてください。

次に福嶋さん、お待たせしました。

○福嶋委員 この「2050年のある1日」というのは非常に面白く読ませていただいて、すごくいいアイデアだと思います。深夜作業本当にお疲れ様でございました。

読ませていただいて5つ、こういう視点もあるといいかなというものを考えましたので、御執筆の参考にしていただければと思います。

第1点目は、第1章から第3章まで、それぞれ場面場面でお話書かれているんですけども、例えば第1章の都会と第2章のニッタ市間の地域の交流がどうなっているかみたいな話も入れるといいかなと思います。

例えば、1つの提案ですが、都会に住んでいるノリサト君が実はニッタ市出身で、親に会いに行くのにどういうふうにして行くかとか、あるいはニッタ市に住んでいる家族とどういう普通の交信をしているか、そんな話を1つ入れられると面白いかなと思います。

○阿部部会長 考えていたのは、ホスピスはニッタ市にあってもいいのではないかなと思って、週末におじいさんのところに行こうという話をしていましたね。だからそのときに高速の何ちゃらみたいなものでつながっているみたいな。

ニッタ市の設定はできれば東北にしたいかなと思っていて、東北の震災後に特区としてこういう形で作り直したみたいなものができればいいかなと思います。

○福嶋委員 私は今航空局で働いているのですごい手前味噌な話で申し訳ないのですが、例えばノリサト君がニッタ市に行くときに、すごく安い値段で飛行機で飛んで行けるようになった、というような話を入れるのも一つの案ではないかと思います。今、日本でも「LCC（ローコストキャリア）」と呼ばれる新しい格安航空会社が3社、今年から運航を開始することになっており、先日、関空でピーチ・アビエーションがすでに開始していて、今年の夏からはジェットスターとかエアアジア・ジャパンという会社が運航を始めるのですが、こういう安いエアラインというものがこれから出てくると思うんです。何も航空分野に限らず他の分野でも低廉で使いやすい移動・交通手段というものが出てくると思いますので、そういうものが2050年における地域間の交流に役立っていくのかなと思っています。これが1つ目の地域間の交流のお話です。

なお、この話に付け加えですが、今、私は家族に会いたいとかそういう話をしましたけれども、例えばビジネスの場面で都会とニッタ市の間で新しいビジネスをやっていくときに、私もなかなかイメージがわからないんですが、ニッタ市との間でどういうビジネスチャンスが生まれているかみたいな話も多少ここに織り込めると、もう少し経済的な話も入ると面白いのではないかと思います。これが1つ目です。

第2点目は、何人か外国人の方が出て来られますね。ベトナム人のスーさんとか、インド人のグプタさんとか、ブラジルからやってきた日系人のオオニシさんとか出てこられるんですけども、その方々がどうやって日本にやってきたのか、なぜ日本に来ようと思ったのかという背景みたいな話が織り込まれていると面白いかなと思います。きっかけは1つは日本に1回観光でやってきて、面白い国だな、住みやすい国だなと思ったから、あるいは日本の活発な地域社会の様子を見て新しい日本社会になってきたなという期待を持って実際に住んでみようと思ったとか、そういうきっかけとか、なぜ彼らが日本にやってきたのかの話を含められると非常に厚みのあるストーリーになってくるのではないかと思います。

第3点目なんですけれども、これはある1日なのでいろんなことを書き切るのは非常に難しいと思うんですが、先ほど永田さんがおっしゃったように災害のような辛い場面もこのストーリーの中に少しどこかに入っていると現実感が増すかなと思います。この日に地震が起こりましたというストーリーにしてしまうと、それだけで話が全部持ってかれてしまうかもしれませんが、何かアクシデントがあったときに、その中で人間がどういうふうに対処していくのかという話を少し入れられるといいかなと思います。現在のストーリー案の中では、トシユキさんが失業してしまったというくだりが辛い場面としてが入っていますので、それはそれで1ついいなと思ったんですけども。

○阿部部会長 セーフティーネットの機能を高めるということで、そのために失業しか入れられなかったんです。もう少し考えます。何かアクシデントが起きた方がいいねと言っていたんです。

○福嶋委員 交通事故への対処というようなケースもありえると思いますし、実際にヨシ

エちゃんが迷子になってしまって近所の人が助けてくれたとか、そんなストーリーも成り立つと思うんですけども、何かしらアクシデントが起こって緊張感が走るような場面があってもいいのではないかと思います。

第4点目は別冊の位置づけなんですけれども、最初に序論を書かれるのではないかと思います。この別冊はこういう位置づけですよというか、序論みたいなものがあった方がいいのかなと思っていて、例えば読み手に対して「こんな社会はどうですか。あなたはこれを読んでみて実現しようと思ったらどういうことをしますか。」みたいなクエスチョンというか、問題の投げかけを最初にしておくと、読み手も行動しやすくなるのではないかと思います。

読み手は例えば政治家かもしれませんし、一般社会の方々かもしれませんし、我々のような役人かもしれませんし、だれでもいいんですけれども、こういうものはどうですかというふうに提案して投げかけるようなコミュニケーションを冒頭に含めておくと、読み手にも問題意識を持って読んで頂きやすいのではないかと思います。

最後に第5点目でございますけれども、手もとの原案の紙の右端に書いていただいているコメント欄は削除せずに、実行された政策と、ある一日の中で描かれている生活の現象の関係、いわば政策と政策効果の関係性を示すいいものだと思うので、コメントはこの形かどうかはわかりませんが、横に何か残しておいた方がいいかなと思います。さらに言えば、それと本体の提言書におけるページ数のリンクみたいなものを書いておくと、すごく厚みが出てくるかなと思います。

長くなってしまいましたけれども、私からの提案は以上でございます。

○阿部部会長 いい提案を建設的にありがとうございました。

もう一人の福島先生、どうぞ。

○福島委員 1つは先ほどの発言と私自身が言ったことが重なるんですが、夢を描く部分と実現可能性がかなり高いものは、ある程度読んだ人にわかるようにした方がいいのだらうと思います。実現可能性が高いというのは、要するに余り巨額の予算を使わなくてもできそうなことで、私自身が提案していたものでは教員養成のカリキュラムを工夫することであるとか、先ほど申し上げた単位の互換性、単位を持っていけるという制度を活発にするとか、あるいはここには書いていないですが、大学入試のOA化、面接などを重視して丁寧に選抜する方法をもっと増やすとか、企業の採用は各企業の自由ではありますが、政策的に多様な選抜方法が企業を取り入れるようにすれば、そこから逆戻りして大学、高校、中学、小学と選抜試験も変わってくると思いますので、最終的に偏差値の高い大学の学生を採るという企業が相対的に利益を上げるという仕組みになっていたら、幾らかけ声をかけてもそこから逆算して塾中心、受験中心の仕組みは変わらないので、言わば出口である企業への採用あるいはその1つ手前の大学入試の部分を何とか工夫できないかというのが1つです。

それと Well-being のことにこだわるようですが、結局よくわからないんです。阿部

部会長が先ほど御説明したのは相当の語数を費やしておっしゃられているので、もっと端的にならないのだろうか。例えば憲法 25 条で言うところの文化的な最低限度の生活を送れる程度のものをイメージして Well-being なのか、玄田さんが最初のころにおっしゃっていたアマルティア・センの議論で出てくるようなニーズの潜在化、あるいは例えばロールズという人が社会的基元財という概念を出したり、この人の議論の場合は尊厳とか自尊心といったものを含めてよきもの、善というふうに示していますが、そういった目に見えないようなものも含めて Well-being に入れるのかとか、その辺りがはっきりしないと何を根拠としてまとめるかという根っここの部分がはっきりしないのではないかと思います。

福嶋さんがおっしゃった地震のことは、私もそれは考えていたんですが、何しろ東大地震研は最初 4 年後までに 70% で起こるといふ、京大はもう少し下げたり、だけれども、文科省も 30 年ぐらいまでには相当の確率で直下型地震が起こるのではないかとやっているんで、38 年後といふのはかなりやばい期間ではないかと思ひます。ただ、地震の問題を出すなら地震編として別の漫画を描かないと、こんなに簡単には済ませられないのではないか。大地震をどうある一家が生き延びるかみたいな感じになるかなと思ひました。

例えばもっと現実的に、国交省なら国交省の関係で計画に入っているものがあると思ひます。例えばリニアモーターカーも 2050 年までには兆円単位の予算をかけてやりますね。大阪と東京を最終的に 1 時間で結ぶ。それを何兆円かかけてやっていくということは本当にペイするののかといふ話とか、各県に赤字の空港が整備されていると思ひますが、そういったものを維持するのがいいのかとか、どこかに現実的なものも 1 つ入れれば読んだときの印象が変わるかなと思ひます。リニアモーターカーなんかは恐らく何年に何をすることとも含めて、相当しっかり決まっているところは決まっていると思ひますので、それは本当に日本としてやるべきなのか。

ほかのことに振り向けたら社会保障とか医療の部分に振り向けたら、もしかするとそちらの方がさきざきの貢献度が高いと思ひます。日本人が大阪と東京を 1 時間で動けることがそんなに大事なことなのかといふふうにも思ひます。それよりがんの治療薬を開発した方がいいのではないかと思ひます。これはコメントです。以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

私がお答えするところでは Well-being ですがけれども、センの議論にするかロールズにするかといふ議論を始めてしまうととても収拾つかないですし、はっきり言って私の頭脳のキャパシティを超えている議論になると思ひます。なのでここはなるべく言葉を費やすしかないですがけれども、どういうことが必要なのかといふことを書いていくしかないのではなかつたと思ひます。それをきれいに定義できるなら私はノーベル賞をもらえるのではないかと思ひます。それを 1 週間の作業でやるのは無理なので、そこのところは御了解いただければと思ひます。そういう意味であいまいになってしまうといふのはあると思ひます。ただ、かなり具体的にこのシナリオがあることによつて、どういうものなのかといふのが見えてくるのではないかと、イメージはつかめるのではないかと思ひます。

それから、実現可能性の高いものと夢のものというのを、例えば私は報告書の本体の方でそれぞれについて色分けしてもいいかなという気がちょっとしました。でも、その反対意見としてそうすると「実現可能性のものだけがやるということになって、夢のものはやらないね」という話にすぐなってしまうのではないかと思うので、それは余り得策ではないかなと思ったりしています。ですので実現可能性は保留させておいてください。

○上村部会長代理 今、永田委員からも福島委員からも実現可能性、つまり財政の問題で出ていると思うんですけども、フロンティア分科会でも財政の問題は結構出ている。財源がなかなか難しいのに、こういう政策を考えても無駄ではないかという話は必ず出てくるわけですが、古川大臣からは財政の問題は度外視してある程度考えてほしいというように言われています。

勿論、実現可能性はすごく大事なんだけど、2050年というタイムスパンを考えれば、枠をはみ出した議論が大事だと思います。古川大臣からは、アウト・オブ・ボックスの話をしてほしいと言われています。

なので私自身、財政学が専門なので、財政のことは一番気にしています。このシナリオの中の人々には、財政もしくは社会保障に対する理解が浸透している。ちゃんと明示的に書いていないかもしれませんが、財政を支えようという意識を人々が持っているということを描いています。財政が持続的な社会になっているということを願いを込めて書いておりますので、よろしくお願ひします。

○阿部部会長 小室委員、どうぞ。

○小室委員 今の財政のこととも関係するなと思うんですけども、まずこのシナリオを読んでとても面白くて、適度に小説的であり、でもすごく説明をしている内容でもあり、本当に素晴らしいと思ってびっくりしました。本当にお疲れ様でした。是非これを充実したいと思っています。

そこにどうしても、こうなったときに経済が発展しているのかどうかということがすごく気になるなと思って、これはすごく個人が共感する内容になっているんですけども、できればこれを読んだ経済界の人にも共感してもらいたいということをすごく思うんです。

そうすると、このときに経営がかえってよくなっているということをイメージさせたいと思って、その方法が余り企業がこうなったらとか入るとつまらないのであれば、何か経営者の人物を出すといいのかもしれないんですが、若いころに経営していた会社では社員は長時間労働でうつになったりとか、育っても育児で辞められ、介護で辞められたりしていたとか、出張費が物すごくかさんでいたとか、グローバル競争の中で日本語しかしゃべれない社員で全然対応できなかったとか、いろんな苦労を経営でしたんだけど、今、新しい会社か2個目の会社を立ち上げているか何かでもいいと思うんですが、2050年でやっている会社に関しては社員が笑顔で、非常に働きやすい職場であることによってグレート・プレース・トゥ・ワークという世界の賞があるんですけども、そういう働きやすい企業ブランドみたいなものを受賞するような企業がぼんぼん増えたりとかして、自社も受

賞して、その商品が世界でヒットしてとかいうような、良質なヒットを出せるような働く環境、生活というものがあることによって、それを商品、サービスでも競争に勝っていけるような状態であり、かつ、経営者と言えれば社員から恨まれ裁判を起こされみたいなことが普通だと思っていたのが、実際には社員の笑顔と社員の家族から感謝されるような経営者というようなことが自分にはできるんだというような実感だとか、そういう経営者のつらさみたいなものも改善されていい社会になっているとか、社員も幼いころから外国人と接点を持って育っていることによって語学が豊かになっていたりとか、単に語学というのではなくて生活の中でスーさんだとか、さまざまな人の考え方、価値観を学んだことによって、それがグローバルに通用する商品、サービスの発想ができるような社員が増えているだとか、この 2050 年のある 1 日が実現していると必ず経済がよくなっていると私は思うんです。

これだとすごく個人はよくなったけれども、経済はどうかとうがった見方をする方がいると思うので、そこの思考を結び付けてあげるようなストーリーが入ったらいいかなというところを、願わくば思いましたというところと、小さな 1 点としてはコーポラティブ・ハウスに認知症の人が 1 人いるといいなと思いました。認知症になってもどこかの施設に閉じ込められてしまうのではなくて、コーポラティブ・ハウスの中で探し物をしながら、道に迷いながら、だけれども、助け合ってそこで暮らしていけるというイメージもあったりすると、より現実的であり、認知症の方の幸せな未来なのかなと思うので、そんな形で入れたらと思うのと、福嶋教郷さんがおっしゃっていたあなたならどうするという問いかけを入れるというのは賛成で、私は最後に入れたらいいのかなと思ったんですけども、こんな社会にするのにあなた自身は明日すぐどんなアクションをしますかというような終わり方というか、問いかけ方みたいな感じで終わったりしたらいいのかなと思って、共感するだけではなくてアクションのことを考えてもらうようなストーリーにできたらいいなと思いました。

以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

経営者の方を入れるならもう 1 章付け加えなければいけないようになってくるかもしれませんが、でも別に短くしなければいけないというのもないと思うので、是非入れたいと思います。認知症の人はいいですね。でも永田先生、どうですか。2050 年には認知症も今のようになり 70 歳ぐらいで発症すると考えていいんですか。それとももう少し遅くなりますか、それとも変わらないですか。

○永田委員 この分野は難しいと思います。というのは、人間は必ず死ぬわけですから。これは避けられないわけですから。死ぬ前に頭がすっきりしているのに死ぬのか、むしろぼけて死んだ方が幸せというところもあります。医学という視点から、先ほど核酸医薬の話をしてしまいましたが、脳梗塞を事前に防ぐような薬とかそういうものがあれば認知症もかなり予防できるようになりますし、実際にそういうものが開発段階にあります。そうすると発症

はかなり先に延ばすことはできます。しかし、どこかでは死は起こる。

○小室委員 寿命も延びますね。

○阿部部会長 認知症の人を何歳に設定すればいいかなど。80歳、90歳ぐらいにしますか。

○永田委員 80歳が現状だと思います。だから90代後半ぐらいでいいのではないですか。

○阿部部会長 では95歳のだれかを入れます。ありがとうございます。

福島先生、何かありますか。

○福島委員 少し発言を確認していただのですが、ついでに申し上げますと、話がずれるのかもしれませんが、やはり実現可能性は考えなくていいと言っても、やはり財源の問題が重要になってくる。それで例えば増税をすと言っても反発が来るわけです。所得税から税をたくさん取ろうとしたら反発が来る。

そうであれば増税がネックで、例えば軌道上とか月面に観光ロケットを飛ばすという計画を立てて、1人10億円ぐらいの料金を取るみたいな、そういう夢のある観光を企画するとか、あるいは石原さんなんかは前から言っていますけれども、ラスベガスみたいなものを東京につくって中国辺りのお金持ちがどんどんお金を落としてもらおうとか、そういう破天荒なアイデアもやっいいのではないか。増税だから反発があるのであって、お金がある人にどんどん使ってもらおうということをすれば、余り反発はないのではないかと思っています。

○上村部会長代理 幸福部会とは別に繁栄部会があります。先ほど経済の話がされましたけれども、繁栄部会との役割分担をどこまで考えるか難しいのですが、幸福部会のウエートは、幸福というか私たちの暮らしに置きたいと思っています。

○阿部部会長 ほかの部会はシナリオをつくらないと思うんです。幸福部会だけそんなことするのみたいに嫌な目で見られているところもあるんですけども、日本経済はどうなっているか、国際情勢はどうなるかということは、余り深入りできないなというのが実は私たちの立場でもあります。

○古市委員 ただ、深入りはできないんですけども、私もできるだけリアリティを持たせたいというのはありまして、特に繁栄とかほかの部会の意見も取り入れつつのストーリーにできればいいなと私自身は思っていて、せっかく財政学者の方とかいろんな専門家の方がいるから、できるだけ個人が書いた夢物語の小説ではなくて、専門家の優秀な方がこれだけ集まっている部会なので、今はコメントという形でしか付けていませんけれども、できれば脚注みたいな形で、ここはこういう裏付けがあって、こんなふうにしたら実現可能だということが、できれば最終的なアウトプットには私自身は入れたいと思っています。それは皆さんに御協力していただきたいと思っていて、だから特に財政に関してはどうやって財源を集めるかということを増税なのか、増税であっても所得税なのかとか、今、福嶋さんがおっしゃったような新しいビジネスアイデアなのか、どうやってお金を集めるかということに関してもう少し具体性があった方がいいかなということは、私自身も書いていてそれは思いました。

○阿部部会長 小室委員、どうぞ。

○小室委員 今の古市さんの意見ですごくいいなと思ったのが、繁栄のチームに侵害してはいけないという気遣いをするなら、逆に繁栄さんがこうおっしゃっていたのでと言って入れたみたいなものにするとうまくいかないとか、シナリオをつくったんだけど、うちだけのシナリオではなくて、ほかの部会のお話を聞いて素晴らしかったので入れましたみたいな感じになると、侵害にならないかなと思ったので、ちょうど今のあるべき姿はそれぞれ4つのフロンティアが並んでいる表を見たら、経済の活性化とか知識集約型の経済にシフトするというコメントが入っているので、そこを入れましたというところがいいかなと思います。

○阿部部会長 事務局長、どうぞ。

○永久事務局長 事務局長からの立場なんですけど、昨日の夜に読ませていただいたんですけども、素晴らしいもので、ただ、やはり今いろいろ議論されているように、よその部会でやっているような議論が入ってこない、なかなか信憑性とか裏付けが出てこないと思うんです。

今、部会長から話がありましたように、ほかの部会ではこういうものをつくるということに対して余り積極的ではないのですが、そこで出てきている議論をこの中に例えば何かビルトインさせるような工夫をすることによって、多分いろんな補強ができるのではないかなと思うんです。ですから、そうしたよその部会と相談してみないといけませんけれども、ちょっと諮ってみたいと思います。最終的にこのシナリオがすべての部会の議論が含まれたような形になれば一番理想的なことになりますけれども、そこまで行くかどうかわかりませんが、そうしたことを検討してみたいと思います。

○阿部部会長 國光委員、どうぞ。

○國光委員 この2050年の1日のものと中間報告書なんですけれども、例えば来週の火曜日締切りとかで一通り委員から自ら赤を入れさせていただいて、最後採択されるのは部会長預かりで構わないと思うんですけれども、そういうことはいかがですか。

○阿部部会長 シナリオの方はもうできていますのでできますけれども、報告書はぎりぎりにならないとできないです。

○國光委員 わかりました。2050年の1日のほうだけでもいいです。最後のホスピスの話を通した医療の関係でも、私も普段政策に関わっていることもあり、この会の意見を尊重しつつ、こういうことだったらいけるなということは書き込めることもあるように感じますし、例えば人生の質という観点を踏まえた終末期医療の話なども是非入れた方がいいと考えます。ということから、自分で赤を入れさせていただいて、部会長と部会長代理に見ていただいて、だめなら消していただいて構わないのですが、多分そういうことをおやりになりたい方もほかにいらっしゃるのではないかなと思ったので、御提案です。

○阿部部会長 提案として受け入れます。ただ、このシナリオはそんなに長いこと私たちの方も、来週は報告書本体も書かなければいけないというのがありますので、来週の水曜

日ぐらいまでにいただければと思います。

○上村部会長代理 分担して書き込めるところは書いていただきたいと思うのですが、3人で書いているのも時間帯を区切って、前もって約束して書いているんです。ファイルが1つしかないので、ごちゃごちゃになると、後でまとめるのが大変だという問題も出てきます。なので結構分担が難しいかなと思います。

○阿部部会長 ですので、ここに実際に書き込むことではなくて、こここのところはこういうふうに入れたらどうですかみたいな形でメールでくださった方がいいと思います。でも全員そうやってくださいと言っているわけではなくて、私はここに取り入れたいと思う方たち。それ以外の方は今この場で言うてくだされば、私たちはそれを取り入れたいと思います。

○新田委員 本当に夢があって素晴らしくて、これがテレビとか映画とかスペシャルとかにならないかなと思って伺っていました。

ニッタ市が世界に注目されているというのは本当に光栄の至りで、私のことではなくて便宜的にニッタ市だと思うんですが、環境的にもエネルギー的にも食料の問題としても極めていいバランスがとれて、素晴らしい将来都市だなと。

お願いというか要望としては、皆さんの名前が本当にバランスよく出演場面があって、非常に素晴らしいなと。ここまでやっていただけるのであれば、ニッタ市としては玄田議員が玄田知事だったり福島先生が市長だったり、先ほどの各部会の将来テーマか何かもここにに入れてもらって、それがこうなったという場面があると皆さんが出ていただけると、もっともっといいいかなとお伺いしておりました。

先ほど永田社長から聞いたんですけれども、インフルエンザウィルスのワクチンが2～3年以内に鼻にちょっと付けるだけで全く発症しない。発症しないというか。

○永田委員 発症する確率が下がる。

○新田委員 極めて少ないというものがローコストでできる。とすれば2025年とか2050年は、ワクチンでかなり病気が防げる可能性があるのかどうなのか。先ほど薬のお話もありましたけれども、そういう部分のお話がふくらんでみると、2050年は病気がないよとか、どう生きるかぐらいに集中できていけば、もっと夢があっていいのかなと思いました。

○阿部部会長 死ぬところは必ずあるでしょうから、最後のダイジロウさんのホスピスの話は出てこなければいけないと思うんです。ですので、そのところで先ほどの永田委員の医療の話を入れさせていただきました。

それから、皆様のお名前を使わせていただいたことについてOKですか。玄田先生、どうぞ。

○玄田委員 まずは大変な力作をお示しいただいて、ありがとうございます。これをできるだけ多くの方に伝えるようになるといいなと思って、3つほど提案をさせていただきます。

まず1点目はお隣の福島さんも触れられたように、基本軸の1つである Well-being のイ

メージについて、もう半歩ぐらい具体的に示せばいい。ただ、部会長がおっしゃるように非常に難しい概念なので、こういうときにどうすればいいかという、大事なのは語源に戻るということだろう。

Well-being を辞書で引きますと、通常 3 つの日本語が出てまいります。1 つはまさに幸福を Well-being と呼ぶ。もう一つは福利。幸福、福利はややこの会の Well-being の訳し方としては、シナリオを含めてやや手あかがついた感もあるし、望ましくないであろう。

そうすると、残されたもう一つの定義が恐らくいいのではないか。それは何と書いてあるかと言うと、それは安寧という概念です。安寧というもともとの意味は、無事で安らかなことという意味であります。それはまさに丁寧に生きていくということ。このシナリオにお三人が込められたメッセージも、やはり幸せというのは一人ひとりが丁寧に自分の人生を生きていって、丁寧に全うするということが大事だということであるとするならば、安寧という言葉は悪くない。

古臭いと思われるかもしれませんが。3 代天皇が安寧天皇ですから非常に古い概念でもあります。ただ、こういう映画でも音楽でもそうですが、ある種ヒットをするためには完全に新しいものはヒットしません。ある種、古くて新しさを感じさせる言葉の方がヒットするので、私の提案としてはもし Well-being とは何かということをもう少し説明するのであれば、語源にさかのぼって例えば 1 つ安寧という言葉に込められた、丁寧に、無事に安らかに皆が生きていき、人生を全うできることという意味は私はシナリオのストーリーから矛盾しない。

しかも基本的 Well-being の保障という言葉で書いてあるのは、基本的人権という言葉とややコントラストするためにも、安寧的なものを人権という言葉の第一義に置くのは決して悪くないだろうと思うのが 1 点目であります。特に安寧というのは調べたら韓国では「アンニョン」、中国では「アンニン」と言うそうで、非常にアジア的なイメージもあって、これから考えていくときにアジアと生きていくという意味でも、安寧的なものは悪くないなというのが 1 点目であります。

2 点目は先ほどの経済のこととかリアリティとも関係するんですけども、この 1 日という日にどうやってたどり着いたのかということのイメージは、もう少し書き込んでもいいかなということを思っていました。それはどういうことかと言うと、前回欠席して申し訳なかったですが、前々回に言ったかもしれませんが、これから 40 年後を考えるとすれば、我々は 40 年前どこから来たんだろうかということのを改めて考え直してやる必要があると思っています。そうすると 40 年前から今までどう来たかと言うと、恐らくスプロール化、拡散化が進んできた高度成長期からバブル経済、そして現在の流れだろう。どんどん広がっていく、外に広がって拡散していくことによって解放を得たり自由を得ていく。文字どおり都市、地域の姿であります。

それに対して今回、私が感じた主たるメッセージはスプロール化の反対、コンパクトを目指していこう。それが大事なんだ。それは地理的にもそうだし人間関係的にもコンパクト

トを目指す。場合によっては経済そのものももっとコンパクトになっていくことが、これから望ましいかもしれないというメッセージ。先ほど地震のことがありましたけれども、東日本大震災後にまず被災地が取り組んでいるのは、もう一回コンパクトな街を取り戻していくということでしょうし、想像したくありませんが、今後また地震があった場合には当然スプロール化に対してコンパクト化を一気に進めていくという流れになっていくだろう。

そしてコンパクト化がなぜ大事かという、それは社会の在り様と同時に生き方として、先ほどの丁寧生きていくためにはコンパクトにしていくということの方がいいのかもしれない。人口減少というのは避けられない現象としても、コンパクトにみんなが顔の見える関係をつくっていくことによって、人口減少を感じさせない人とのつながりをつくることできるかもしれない。人口減少という寂しさを回避するために、コンパクトということのイメージはもう少し打ち出してもいいのではないか。コンパクト化が行き着いた先が、先ほどの屋台村のようにみんなが集まってご飯を食べたりとか、国の単位ではなくて街や都市を単位にして考えるという発想にするならば、いろんな試行錯誤を経てコンパクトな街、コンパクトな地域、コンパクトな生き方、コンパクトな経営を目指した結果がこういう1日になったということはあってもいいのかなと思いました。

3点目は、広く関心を持ってもらうためには、ある種数値もしくは数値目標的なものを書き込んでいくこともいいのではないか。しかもそれがこの部会のメッセージになるのではないかと思いました。

具体的に言えば私も財源のことは気になりまして、この世界は消費税何%で実現されている世界なのかなというのは正直思いました。私は何ら根拠はありませんが、25%ぐらいかなという感じをして、何とか財政赤字の問題と社会保障、貧困の問題に対応するには25%ぐらいかなという感じがしました。

ただ、これもいきなり25%なんて言うと大変驚きますが、やはり段階的に小刻みにやっていくこと、また、景気に配慮することで何とかここまでたどり着くことができたみたいなことは、あるべきシナリオとしても書いていいと思いましたが、先ほどの失業率についても、私は決して失業率が非常に低い、ゼロの社会ではないのではないかと思いました。10%ぐらいかなと。

ただ、10%というのは欧米の先進国から見ても決して高い数字ではなく、何となくこの当時には10%を超えたらレッドゾーンだねという社会の認識があって、失業率10%を超えない社会づくりとか、貧困率で言えば16%の半分の8%を目指して、今は8%ぐらいだとか、自殺者数はわかりませんが、先ほどの医療とか健康などを含めて3万人の半分の1万5,000人ぐらいになっているとか、少し数値目標的なものとか、こういう数値になっているといいよねというのが幸福部会からメッセージとしてあると、特にこういうミクロな生活とマクロな環境というものが両方あって、リアリティを示すような内容になるのではないかと思いました。

以上、3点です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

安寧は私は知らない言葉でした。でも是非使わせていただきたいと思います。そのところの執筆を玄田先生にお願いしたいと思ったりしているんですけども。

○玄田委員 お断り申し上げます。

○新田委員 消費税の話なんですけれども、諸外国に行くとヨーロッパは22%とかと聞かれますが、食べ物だけはみんな安くしているというか、ないとかで。ですからお金を持っている人たちは支払ってもいいものに対して、ぜいたく税と言うんですか、付加価値税と言うんですか、そこは明確に言っておいた方がいいと思うんです。でないと食べ物がそういうふうになってしまうと生活の部分が。

○阿部部会長 食べ物にするか基礎的な必需品だけにするか。食べ物でもすごいぜいたくな食べ物もあると思います。

ただ、私が最後の玄田先生のお話で思ったのは、貧困率ですとか失業率の数値目標みたいなものは、私は貧困率の数値目標を入れたいと最初から申し上げていたと思いますけれども、それは本体のところに入れるべきだと思っています。シナリオにわざわざ書き込む必要はないのかなと思っています。

ただ、消費税が何%かというのは、それは目標ではなくて手段であって、それは書き込む必要のあるものなのかという気はするんです。私たちはどのようなものを目指すかということなので、消費税が何%になった根拠は何ですかとか言われてしまうと、かなり難しいところがあるのではないかと考えていて、あるべき姿の目標というのと、それを達成するための手段を別に考えるべきではないかと考えています。

上村先生、何か付け加えますか。

○上村部会長代理 私も消費税のパーセンテージは恐らく20%を超えているだろうなというイメージは持っています。けれども、そこを書き込むのはどうかなという気がしています。確かに高くなっているような気がしますが、書き込むと消費税率の引き上げが目標になってしまいます。それは目標ではないです。消費税の税率はなるべく低い方が私はいいと思います。ただ、みんなで負担しているんだという社会があるということはメッセージとしては入れたいと思います。

○玄田委員 できれば本体でそういう数値に関することは御議論いただければ大変ありがたいと思います。

○阿部部会長 福島委員、どうぞ。

○福島委員 今、消費税の話がたくさん出ていますけれども、もとに戻って福島先生とか玄田委員からも地震の話がちょこっとあったので。

生活の安全とか安心みたいな部分というのは、Well-beingとか先ほどの安寧の定義と大分関わってくると思うので、報告書の本体の中にも少し例えば災害に強い国づくりとか、そういった概念も少し入ってきてもいいのではないかと考えています。

一方、「2050年のある一日」に関しては、もし地震の話を入れると1つまたもう一編つくらなければいけないのではないかという話があったので、私もすごい大変だなとそれは思うんですけども、この中に組み込む方法としては、例えばニュースを見ていて日本のどこかの都市で地震が起こったんですが、日本がいろんな政策をとってきた結果、被害が大分食い止められましたというような話を、エピソード的に入れるというのは1つあるかなと思います。それは過去の災害のいろんな教訓が生かされて、例えば先ほどの話のあった都市のコンパクト化であるとか、あるいは迅速な避難を可能とする災害対応の体制であるとか、あるいは建築物の耐震化が大分進んで被害自体が軽減されましたとか、そういった話があってもいいかなと。

あるいはトシユキさんとアヤさんが家を選ばれたときに、安全なコミュニティで耐震化された建物を選びました、というような話も、どこかで少し触れられるといいかもしれません。いずれにしても、工夫次第で災害の話も「2050年のある一日」の中に入れられるかなという気がしました。

○阿部部会長 ニッタ市は東日本大震災の中から復興してきたモデル地区みたいな設定にしようと思っているので、そのときに得られた経験というものが日本全国に浸透しているという設定にしたいと思っています。1つどこかで地震が起こったという設定でもいいと思いますけれども、例えば今、トシユキさん一家は霞が関という地名が出てきますから東京に住んでいるんですが、東京は2020年に起こった大震災で首都移転したというふうにしてもいいと思いますけれども、そこまでやらなくてもいいかもしれません。古市さん、どうですか。

○古市委員 どちらがいいのか。地震が東京、関東で起こっていることにした方がいいのか、これから起こり得るから準備しているという設定にした方がいいのか、両方あり得ると思うんですけども、例えば2040年に起こっていて、その後、防災意識が更に高まって、防災訓練とか東京でもかなり緻密に行われるようになったということが1個の案で、もう一つは2050年になってもそれこそ2012年からずっと起こる起こると言われていたけれども、2050年になっても起こってなくて、どうしようかという形でこれだけ対策がなされているという両方の形で組み込むことは多分できると思うんですが、どちらの方がいいですか。

○阿部部会長 先ほどのパーセンテージの話をする、2050年までにはかなりの確率で起こっているというのであれば、起こっているという想定で書いてしまうというのがあります。

○古市委員 起こっていて、起こったことによって意識が高まったみたいな形で書くといいのかもしれないですね。先ほど國光さんがおっしゃったような、特に医療に関してもここは弱いと思うので、逆に専門的なことに関しては本当に、この内容に直接みんなで書きこんでいくというのであれば、逆に教えていただきたいというか、こういう仕組みができているとか、こういうことに関しては教えていただきたいなと逆に私の方も思いました。

○阿部部会長 國光委員、どうぞ。

○國光委員 先ほどご提案したのは、部会長、部会長代理お二人で書かれるというのは、作業のご負担が集中し大変なのではないかと感じましたことと、各委員の参加という点で妥当性もあろうかと思ってお伺いした次第なんですけれども、また1つご提案なんです、うまく事務局とも連携なさって、アウトソースして作業いただければいいのではないかと。あくまで自発的に参加すればいいので、やりたい人がやるということによろしいのではないのでしょうか。

○玄田委員 勿論協力することはやぶさかではないけれども、やはりこれは少人数の人が書く方がばらばら感がなくて、リズム感が違うので、できるだけそこはお三人、特にお二人に頑張っていて、適宜必要なところはみんなでサポートするという体制を、この1週間持てばいいのではないかとということです。

○阿部部会長 事務局にもデータですとか統計のところでの確認とか、そういうことをすべてお願いするつもりではあります。ただ、私たちは皆研究者なので、共著を書くことに慣れていないというのもあると思うんですが、せいぜい2人か3人かなというところなんですけれども、そういう方が恐らくテンポ的に速く進むと思います。それに適宜足りないところを皆様に御専門の観点から補充していただく。場合によってはこのパラグラフは書き切れていないので、お願いしますというメールをお送りすることがあるかもしれませんので、そのときには皆様よろしくお願ひしたいと思います。

最後に何か。

○玄田委員 簡単に、今の提案に賛成だということを申し上げたくて、よくある報告書のようにみんなの意見を万遍なくすくい取るようなことだけは、絶対ないようにしていただきたいということです。それはつまらない報告書にしかならないので。

○阿部部会長 福島委員、どうぞ。

○福島委員 最終的には部会長がえいやで書いていただければいいと思います。私たちは好き勝手なことを言っているんで、それが1つ。

それから、玄田さんが言われた安寧というのはよいと思います。余り手あかにまみれていなくて、やや静的な、スタティックな位置づけの感じはあるけれども、それはそれでいい。このシナリオともフィーリングが合うだろうと思います。

3つ目で、数値目標というところまでは書かないにしても、そして税の種類は書かないにしても、例えば国民負担率が一定以上上がっているということは書かないと、そんな夢物語はあり得ないですと笑われて終わってしまうと思うんです。障害者の分野でも障害者の福祉予算の対GDP比がOECDの中で下から3番目ぐらいですみたいなことはよく言われるんですが、一方でOECD三十何か国の中で国民負担率は日本が一番低いというデータもあるんです。それを言われてしまったら障害者関連が低いのは当然だよねと言われたら、反論できないんです。だからやはりいいとこ取りはできないので、国家にしても地方政府にしても、そこにお金を預けるという感覚で、負担するということはどこかで書く必要が

あるのではないかと私は思います。増税と書かなくても国民負担率でもいいので。

○阿部部会長 わかりました。みんなが負担に納得しているということは書いているつもりなんですけれども、その負担率が今より上がっているということは余り明示的にはないと思うので、意図的には入っているんですが、そこをわかるような形で書いていきたいと思います。

古市委員、どうぞ。

○古市委員 それに関連してなんですけれども、過去の歴史をここの2050年にどう至ったかということを入れた方がいいという意見も先ほどありましたが、具体的に逆にアイデアをいただきたいのは、どうしたら高負担の社会というものが、中負担かもしれないですけども、実現可能になると思いますか。どうしたらリアリティのある形でそういうようなシナリオを、例えば過去に起こったこととしてそういうことを組み込めるかというアイデアがあったらお聞きしたいんですが、何かアイデアがありましたら教えていただけますか。

○阿部部会長 國光委員、どうぞ。

○國光委員 繰り返しておりますように、負担できる人がちゃんと払うということだと思うんです。もっとはっきり言えば、いわゆる過剰貯蓄をされているような高齢者の方に、いかに気持ちよくお金を払っていただけるか、この処方箋は社会保障にも財政再建にも経済成長にも共通すると思っておりますが、そのような理解を促し、世代内・世代間の再分配の仕組みを作ること。これらはこれ以上避けて通れないと思います。給付と負担のアンバランスを改善し、自分でできる人は自分でやっていただくとともに、本当に困っている人にサービスを届けることを是とする社会を、未来に向けて描ければと思います。そのあたりは、最後まで通るかは分からないにしても、幸福部会としてははっきり言われた方がいいと思います。

○阿部部会長 玄田委員、どうぞ。

○玄田委員 3つぐらい可能性があって、1つは残念ながら悲劇的なことが起こる。先ほどあった地震のようなことでたくさんの方が亡くなって、新たな財政負担をしなければいけなくなるとか、日本の国債が暴落して日本が財政赤字をとて返せないということが白日にさらされると、それは変わらざるを得ない。

2つ目が、ここに書いてあるように今の負担の一番大きなところである若年層等々が中心となって政治力を持つ。それはいい意味か悪い意味かわからないけれども、非常にリーダー的な資質を持った人が現れてくる。それは偶然かもしれないし教育の成果かもしれない。

3つ目は想像できないけれども、さらなる情報革命が起こる。インターネット、Twitter、Facebookに次ぐ、もう少しそれこそフェイス・トゥ・フェイスに近いような志のある人たちがつながり合っていけるようなさらなる情報革命。このぐらい起こるとあるのではないか。そのほかにもあるかもしれないけれども、今、負担に関する意思決定の構造が変わるとするならば、このぐらいのことはまず考えられるのではないか。

○阿部部会長 今このシナリオに書かれているような IT 革命だとか屋台村だとか、それぐらいではまだ手ぬるい、もっとすごい革命がなければだめということですか。

○玄田委員 革命というものをどういうふうに定義するかによりますけれども、やはり先ほどの消費税も含めて政治的な意思決定に影響を与えるためには、政治的な関わりがない限り難しいのではないですか。

○阿部部会長 そうすると、最後のタイジロウさんの回顧のところでの政治的ムーブメントみたいなものを、もう少し詳しく書いていく必要があるような気がします。

○玄田委員 お書きいただいてもいいかと思えますけれども、それは多分消費税何%と書く以上に物すごく書きにくいことではないかと思えます。

○阿部部会長 やれるかどうか考えます。

○玄田委員 それは 2 人の勇気の問題ではないですか。

○阿部部会長 事務局長、何かありますか。

○永久事務局長 一応私も何かの専門家なんですけれども、選挙のことなどをずっと勉強してきたものですから、ただ、時間がないのでお話しません。

1 点だけ事務局長として。キャッチフレーズを考えていただきたいというのがあります。例えば繁栄の部会ですと、これがそのままキャッチフレーズになるかどうかわかりませんが、1 つ基本原則として「未来を搾取する社会から未来に投資する社会へ」ということを書いてきています。そういうようなものというか、違ったものでも構いませんけれども、何か一言で幸福の部会が目指すような言葉を、先ほど安寧という言葉も出てきてよかったなと思っていますが、そうした言葉を使ってワンフレーズで表現できるようなものをつくっていただければなと思っています。難しいと思うんですけれども、何とぞよろしくお願いいたします。

○阿部部会長 何かキャッチフレーズを今すぐに思いつかなくても、後でも皆さんメールなりでお送りいただければと思います。

時間になりました。議論は終わらせていただきたいと思えます。

今回は 26 日 10 時から 12 時です。

○福島委員 メールはどなたにお送りするのでしょうか。

○阿部部会長 私か上村先生でお願いします。